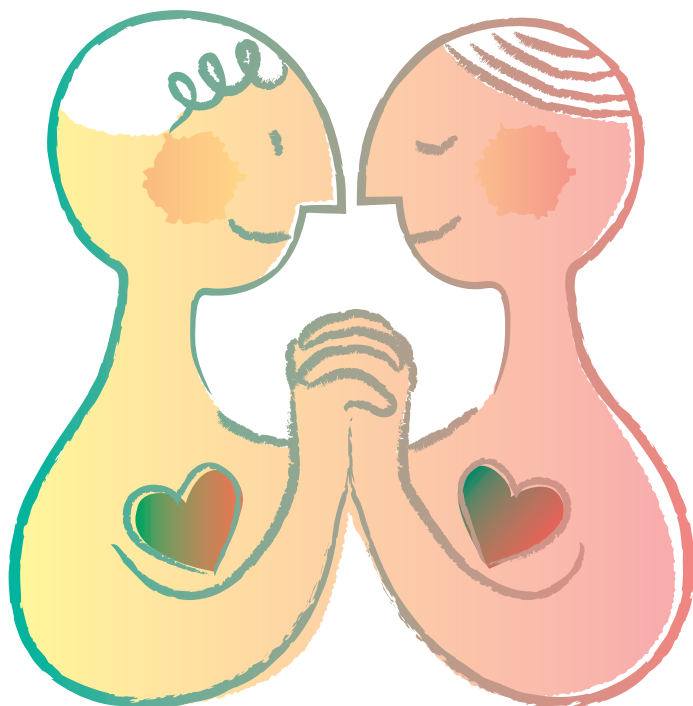


VI

ピア・サポート活動のために
医療者ができること





背景

医学の進歩とともに、がんはイコール死ではなく、がんと共に生きる時代となりました。それでも、多くのがん患者さんが、がんであることからくる不安、孤独感や恐怖、体調管理のほか経済面や就労の困難など、生きにくさを感じながら生活をしている現状があります。がんになってさまざまな不安を感じた時に、人はどのようなことを思うのか想像してみてください。治療法の選択や仕事や経済面といった生活面の不安だけでなく、がんでありながらこれから生きていけるのか、という根源的な不安をもつことが少なくないでしょう。

そのような時に、同じくがんと診断され病気と共に生きてきた体験者と出会い、寄り添って話を聴いてもらうことで、自分一人ではないと孤独感が和らぎ安心感が得られます。患者さんや家族が、がん治療を継続するためには、がんであることと共に生きていく力が大事であり、ピア・サポート活動が求められている所以であります。

2012年に閣議決定された第2期がん対策推進基本計画では「がん患者の不安や悩みを軽減するためには、がんを経験した者もがん患者に対する相談支援に参加することが必要」とピア・サポート活動が明記されており、国や地方自治体だけでなく医療機関においても、がん患者・経験者との協働によるピア・サポート活動の推進が求められています。

しかしながら、2018年の第3期がん対策推進基本計画において、相談支援における課題とされているように、ピア・サポート活動は必要とされているにも関わらず、全国的に普及していないのが現状です。がん患者さんや家族に求められているピア・サポート活動を医療機関で根づかせるためには、ただピア・サポーターが医療機関にいるというだけでは活動は継続していきません。医療者がピア・サポート活動の意義を理解し、しっかりと連携し支援をすることにより、ピア・サポーターはその力を発揮することができるのです。

この章では、医療機関でピア・サポート活動を開始し継続するため

のポイントを記しています。それぞれの医療機関の事情に合う形に取り入れていただき、実践されることを願ってやみません。



ピア・サポート活動の意義を理解し、目的を明確にする

1 ピア・サポート活動の意義を知り、共通理解をする

多くのがん患者さんや家族が利用する医療機関だからこそピア・サポート活動が求められていることを、職員が共通理解できることが大事です。医療者ではなくピア・サポーターにしかできない支援があるということ、広く院内で理解してもらえるように働きかけることが大切です。実際にピア・サポート活動をしている方のお話を聴く、ピア・サポート活動を要望する患者さんや家族の声を拾い、院内に伝える機会をつくるなど、それぞれの医療機関に合った方法を考えてみましょう。

2 院内での理解者、協力者を増やす

新しくピア・サポート活動を始めるためには、ひとつの部門や少数の職員だけでは、活動を支える地盤づくりは難しいでしょう。ぜひがん診療に関わる医療者を含めて、院内の理解者、協力者をつのり、仲間を増やしましょう。

3 ピア・サポーターの立場性を理解する

ピア・サポーターは、自身の体験を生かして、患者さんや家族に寄り添うことのできる唯一無二の存在ですが、その方たちの問題を解決する責任はありません。患者さんや家族でもなく、医療者でもないという独自のスタンスを、医療者は理解しておく必要があります。

4 ピア・サポート活動のコンセプトをつくる

どのようなピア・サポート活動が望ましいのか、立ち上げに関わる関係者やピア・サポーターやピア・サポーターの所属団体などで十分

に話し合しましょう。そしてどのような機能、場が望ましいのか、コンセプトを決めましょう。

1) いろいろなピア・サポート活動があります

ピア・サポート活動には、さまざまな対応方法や場、スタイルがあります。

① 個別の対応

- ・一人の利用者に一人のピア・サポーターが対応する
- ・一人の利用者に複数のピア・サポーターが対応する
- ・がんサロンの場で、上記の対応をする など

② がんサロンの場での対応

- ・不特定多数を対象としたがんサロンで複数の利用者に一人のピア・サポーターがファシリテーターとなり対応する
- ・上記を医療者と連携しながら行う など

③ 短期間のピア・サポートグループでの対応

- ・短期間のピア・サポートグループとは、期間を限定し、ある程度明確な患者群(告知後の患者さんなど)を対象とする、講義や話し合いなどから構成されるプログラムでのグループ
- ・がん治療を支える社会資源の講義+参加者同士の語り合いにピア・サポーターがファシリテーターとして入る など

2) 実際のピア・サポート活動の運用を設定する

活動場所、曜日や時間帯、活動頻度、予約制の有無、など具体的な運用方法を決めます。

① 活動場所について

がんと診断されたことや病状について、友人・知人や職場の人に知られたくないと思っている人は少なくありません。心配をかけたくな

い、仕事の面で不利益な扱いを受けたくないなど、いろいろな理由があると思います。患者さんや家族に十分に配慮しながら、活動場所を設定するようにしましょう。

オープンスペースは気軽に立ち寄れたり、活動の存在自体を知ってもらいやすい反面、中にはあまり人目につく場所で相談をしたくないと思う方もいるでしょう。詳しく話を聴く場合は、話し声が漏れない環境が望ましいでしょう。また、活動中にピア・サポーターが困った時や相談したい時に、ピア・サポート活動の担当職員が対応しやすい場所であることも望ましいでしょう。

5 ピア・サポート活動の企画書を作成する

院内で活動をスタートさせるためには、管理者だけでなく、診療部や看護部、事務部といった各部門の承認を得る必要があります。そのために、院内でピア・サポート活動開始の伺いを立てる企画書を作成しましょう。



院内でのピア・サポート活動を支える組織をつくる

ピア・サポート活動を継続していくためには、実際の活動をサポートする担当職員だけで運営を行うのは限界があります。院内にしっかりと根づかせ、継続させていくためには、診療部門を始めとした医療機関内の各部門の協力が欠かせません。ぜひ、活動を運営、推進する組織をつくり、その中で活動のルールやピア・サポーターへの協力体制など運営について協議ができるようにしましょう。

1 組織の位置づけを決める

診療部門や看護部門などの理解と協力を得て、院内で認知度を高めるために、効果的な位置づけをすることが重要です。できれば管理者もしくは執行部に近い医療者の協力が得られるとよいでしょう。

例) がん診療連携拠点病院運営委員会の下部組織としてピア・サ

ポート活動運営委員会を設置するなど

2 組織のメンバー構成を決める

新しくピア・サポート活動を始めるにあたり重要なのは、実際のピア・サポーターの声を反映し、協議しあう生きた組織づくりです。それぞれの医療機関でのピア・サポート活動のあり方によりメンバー構成は異なりますが、院内の職員は、診療部門や看護部門、事務部門、相談支援センター職員、その他の職員など横断的な職種構成が望ましいでしょう。ピア・サポーター側は、実際に活動を行うピア・サポーターもしくはピア・サポーターの所属団体の代表者、行政がピア・サポート活動の実施やピア・サポーター養成の主体である場合は行政担当者が参加できるとよいでしょう。日頃の活動をピア・サポーターを含めて協議し、課題があればタイムリーに振り返りができるよう、定期的に会議を開催することが望ましいでしょう。



D 予算の確保をする

ピア・サポート活動を継続するためには下記のような予算が考えられます。ピア・サポート活動の運営について、がん診療連携拠点病院としての事業の計画に上げるといった取り組みが挙げられます。

例) ピア・サポーターへの報酬

ピア・サポーターへの交通費

広報のためのポスターなどの印刷費

備品 (パソコンや文房具など) など



E ピア・サポート活動の決まりごとをつくる

目的や活動内容、院内でのルール (患者さんや家族の個人情報を守る、医療相談は対応しない、特定の治療を勧めないなど)、記録の取り扱いのほか、報酬 (交通費や日当など)、活動の責任の所在などを

医療機関とピア・サポーター、自治体担当者などで話し合い、内規などの文面にしておくといよいでしょう。医療機関によっては、ボランティア保険加入を必須としている所もあります。病院外部の協力者への対応について、既存の対応例がある場合は、それらを参考にするとよいでしょう。



実際のピア・サポーターへの支援

医療機関では沢山の専門職種が存在しており、ピア・サポーターにとっては、病院という慣れない組織の中で活動することは不安があるかもしれません。ピア・サポーターが円滑に活動できるように、院内での窓口担当部門や担当者は必ず決め、その人たちは、日頃からピア・サポーターの方たちとコミュニケーションをとるようにしましょう。

支援内容の例

1) 相談の中での困りごとにタイムリーに対応する

ピア・サポーターが分からないことがあり判断に困る時は、いつでも連絡・対応できるような体制が望ましいでしょう。

2) 活動の振り返りをピア・サポーターと共に行う

個別のピア・サポート活動では、どのような話が利用者からあったか、ピア・サポーターからフィードバックをもらうようにしましょう。フィードバックの中から、利用者のニーズの一端を知ることができます。また、ピア・サポーターから相談がある場合は、できるだけ時間を確保して対応をしましょう。ピア・サポーターは、自らの患者体験などを生かして、ピア・サポート活動に臨んでいます。さまざまな価値観と病気の体験をしている利用者との対応場面では、時にピア・サポーター自身が悩ましく思う時や、つらい思いをすることがあるかもしれません。ピア・サポート活動に関わる医療者は、ピア・サポーターの方たちが、自らの体験を生かして患者さんや家族のサポートをしたい

という思いから、自発的に行動を起こしていることを忘れずに、相談がある時は耳を傾け、必要な時はサポートを行うことを心がけましょう。

活動の振り返りは活動を行うピア・サポーターだけでなく、必要に応じピア・サポート活動の運営母体の代表者や自治体担当者とも行うとよいでしょう。

【事例1】

医療機関内のピア・サポート活動運営委員会を定期的を開催し、ピア・サポーター、医療者、自治体担当者などが集い、対応した相談の振り返り、運営の課題点、展望などを話し合う。

3) 活動記録を管理する

その日の活動は、基本的に記録に残してもらい、担当者が管理をすることが望ましいです。記録の保管場所や扱い方などを決めておくようにしましょう。

4) 活動の管理をする

活動当日にピア・サポーターが体調不良の場合など、急を要する時の連絡方法を決めておきましょう。

5) 活動報告を作成する

ピア・サポート活動を院内に周知し、理解・協力を得るために、活動報告をつくり、定期的に会議体などで報告をするようにしましょう。



患者さんやご家族、市民への広報を行う

ピア・サポートを利用したいかもしれない患者やご家族に情報提供します。院外からも参加できる場合は、市民への広報も役に立ちます。ピア・サポートはあまり一般になじみのない概念なので、活動内容を分かりやすく伝える工夫が必要です。

【事例】

院内でのポスターやチラシの掲示と配布、病院もしくは行政のホームページ、行政の広報紙、当日の院内放送、地域での医療者の集まりや会議体での情報発信など



院内の職員への周知を行う

がん診療に関わる医療者を含め、職員への周知がされ、一定の理解が得られることは、ピア・サポート活動への認知度が高まり、ピア・サポーターが活動しやすくなる土壌をつくることとなります。

【事例】

診療部を対象とした会議体での周知、がん診療連携拠点病院運営関連の会議体での周知、職員向け広報誌の活用、講演会等を通してピア・サポーターと院内職員が交流する機会をもつ など